

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教 員 氏 名	
加藤 健太 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：スマホ時代の哲学—失われた孤独をめぐる冒険—</p> <p>著 者：谷川嘉浩</p> <p>出版社：ディスカヴァー・トゥエンティワン ISBN：4799329138</p>	<p>ぼくたちは、スマホを常に持ち歩いて生活をしている。そして、インターネットに「常時接続」し、世界と繋がっていることを確認する。にもかかわらず、SNSは寂しさを加速させ、多くのひとと繋がっているはずなのに、一人だと感じて他人を依存的に求めてしまう。それはなぜか。</p> <p>本書は、スマホ時代に直面する上記の問題に対して、ぼくたちがどのように向き合うべきかという点に「哲学」を用いて接近し、とってもオモシロい議論を展開している。</p> <p>「哲学」を「終わらない未知を面白がり、謎に取り組み続けようとする生き方」と捉えるならばから、困ったときのためにそばに置いておくといいし、本書はその（最初の）一冊に相応しいと、ぼくは思う。推薦する所以である。</p>
<p>② 図書名：ポテトチップスと日本人</p> <p>著 者：稲田豊史</p> <p>出版社：朝日新書 ISBN：4022952110</p>	<p>何の科学的根拠はないけれど、小学校を卒業した時点でポテトチップス（ポテチ）を一度も食べたことのない日本人は、ほとんどいないだろう。</p> <p>今や「国民食」といってもよいポテチ。しかし、このお菓子の日本史をきちんと描いた書籍は、管見のかぎり存在しなかった。本書は、そんな未踏の地に挑み、成功を収めた、とってもオモシロい一冊である。</p> <p>米国における誕生からコロナ禍の現在までの期間を対象に、ポテチがどのような変貌を遂げ、その過程で企業はいかなる経営行動を選択してきたのか。経営史の視点から読んで、たくさんの新しい発見があった。</p> <p>一つだけ紹介すれば、岩倉使節団が1872年5月、米国ニューヨーク州のサラトガ・スプリングズに宿泊した際、「蕃薯ノ油煎」（ポテチ）を食べた記録が残されている。この話は、ぼくが誰かに伝えたくなくて、戦前期日本経営史のオープニングトークに使ったくらいである。</p> <p>ポテチ好きなひとはもち、そうでないひとにもぜひ読んでほしいっ(^_^)</p>